

スペイン語圏を知る本 (その54)

篠田有史(写真)／工藤律子(文)『ドン・キホーテの世界をゆく』

(論創社、2009年)

評者 坂東 省次

2010年1月31日付の朝日新聞朝刊にこんな記事が掲載されていた。「ドン・キホーテは騎士道物語にあこがれて、自分も騎士になったつもりで旅に出た。こっけいなんだ。でも、歩み始めた時には誰でもこっけいに決まっている。あちこちぶつかり、だんだん一人前になっていく。」(朝日教育講演会・ノーベル賞・益川敏英さん)

ドン・キホーテとは今からおよそ400年も前の1605年(前編)と1615年(後編)に刊行された長編小説『ドン・キホーテ』の主人公である。日本に紹介されたのは原典出版から200年以上も経過した明治時代のこと、とりわけ大正時代にツルゲーネフの『ドン・キホーテとハムレット』の翻訳が出て、ドン・キホーテ型とハムレット型が人口に膾炙した。広辞苑にいわく、「ドン・キホーテ型とは、現実を無視し、自分の空想や独りよがりの正義感にかられて向こう見ずの行動に出る人物の類のことである」と。

『ドン・キホーテ』とはそもそもスペインのラ・マンチャの田舎に暮らすアロンソ・キハーノという貴紳が騎士道物語を読みふけり、ついに自らを遍歴の騎士に任じて、世の不正を取り除く戦いを決意し、遍歴の旅に出る物語である。キホーテは、本性のQuijanoの最初の文字Quijにちょっと滑稽味を加える時に使われる接尾辞oteをつけたもの。その前に、当時相当身分の高い人にしか使われなかった敬称(don)をつけて、Don Quijote「ドン・キホーテ」が誕生した。名乗るときには名前の後に出身地名「de la Mancha」をつけて、Don Quijote de la Manchaと名乗る。

その原典『ドン・キホーテ』は前編52章、後編74章の計120章からなるが、本書は前編6章と後編6章のわずか12章にすぎない。これだけの章で果して長編小説「ドン・キホーテの世界」

を読者に紹介できるのか不安であるが、そんな心配は無用だ。表紙の「ドン・キホーテとサンチョ・パンサの旅」に始まる数多の写真によって、読者は「ドン・キホーテの世界」に容易に入り込むことができるし、また名文で綴られたエッセイによっても「ドン・キホーテの世界」が生き生きと伝えられているのだ。共著者はともに「ドン・キホーテの世界」の初挑戦であるが、両名のドン・キホーテの精神によって日本初のフォトエッセイ『ドン・キホーテの世界をゆく』は見事に成功しているといえるだろう。

騎士道物語の英雄といえ、数々の冒険をあり得ないような力でじつにカッコよく生き抜くのにに対して、ドン・キホーテは不器用で、ボロボロになりながら生き延びた。著者はセルバンテスのメッセージをこう解釈あかしている。「カッコいい英雄でなくていい、たとえ人々にバカにされようとも、叶わぬ夢、理想を追い続ける強い精神をもつ人間こそ、真に崇高な存在なのだ。」

本書の最後には、歌舞伎俳優松本幸四郎の特別寄稿『ドン・キホーテへの旅』が掲載されている。

『ラ・マンチャの男』を長年演じてきた松本幸四郎は「ドン・キホーテ」と出会ってからじつに36年を経てはじめてスペインの大地に足を踏み入れた。松本は、スペインで、『ラ・マンチャの男』の台詞、「あるがままの自分に折り合いをつけるのではなく、あるべき姿のために闘う」という、誇り高き言葉の意味を噛みしめる。

冒頭の益川のドン・キホーテ像、著者のドン・キホーテ像そして松本のドン・キホーテ像にはいずれもその根底において、見果てぬ夢に挑戦する人間の真摯な姿が見えてこないだろうか。

ばんどう しょうじ (教授・スペイン語学)